

琉球大学教育学部



2023（令和5）年度

教職実践演習ガイドブック

目次

- はじめに：教職実践演習とは…………… p2
- 琉球大学の教職実践演習について：教職実践演習の実施に関するガイドライン…………… p3
- 琉球大学教育学部の教職実践演習について 1：教職実践演習と教職カルテに関する申し合わせ p4
- 琉球大学教育学部の教職実践演習について 2：教職実践演習の目標…………… p5
- 琉球大学教育学部の教職実践演習について 3：評価基準表…………… p6-7
- 2023（令和5）年度 教育学部開設 教職実践演習 シラバス一覧（扉）…………… p8
 - 1：教職実践演習（1組）：教育実践学専修提供① 附属小学校クラス…………… p9
 - 2：教職実践演習（2組）：教育実践学専修提供② 公立小学校クラス…………… p10
 - 3：教職実践演習（3組）：教育実践学専修提供③ 離島へき地校クラス…………… p11
 - 4：教職実践演習（4組）：教育実践学専修提供④ 小学校の授業づくりクラス…………… p12
 - 5：教職実践演習（5組）：子ども教育開発専修提供クラス…………… p13
 - 6：教職実践演習（6組）：国語教育専修提供クラス…………… p14
 - 7：教職実践演習（7組）：社会科教育専修提供クラス…………… p15
 - 8：教職実践演習（8組）：数学教育専修提供クラス…………… p16
 - 9：教職実践演習（9組）：理科教育専修提供クラス…………… p17
 - 10：教職実践演習（10組）：音楽教育専修提供クラス…………… p18
 - 11：教職実践演習（11組）：美術教育専修提供クラス…………… p19
 - 12：教職実践演習（12組）：保健体育専修提供クラス…………… p20
 - 13：教職実践演習（13組）：技術教育専修提供クラス…………… p21
 - 14：教職実践演習（14組）：生活科学教育専修提供クラス…………… p22
 - 15：教職実践演習（15組）：英語教育専修提供クラス…………… p23
 - 16：教職実践演習（16組）：特別支援教育専修提供クラス…………… p24
- 教職実践演習 登録のためのチェックリスト（小学校／中学校）…………… p25-26

はじめに

教職実践演習とは

2020（令和2）年1月

教育学部教務委員会

【教職実践演習とは】

2010年度入学生から4年次後学期の必修科目として位置付けられた、教職課程（教員免許を取得するカリキュラム）の総まとめとなる科目です。

【教職実践演習が始まった経緯、その趣旨】

2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の提言を受けて、2008年11月に教育職員免許法施行規則が改正され、教職課程に「教職実践演習」が新設されることとなりました。その趣旨は、次のように示されています

◆「教育職員免許法施行規則」第2条第1項の表：備考第10号より

教職実践演習は、当該演習を履修する者の教科及び教職に関する科目（教職実践演習を除く。）の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものとする。

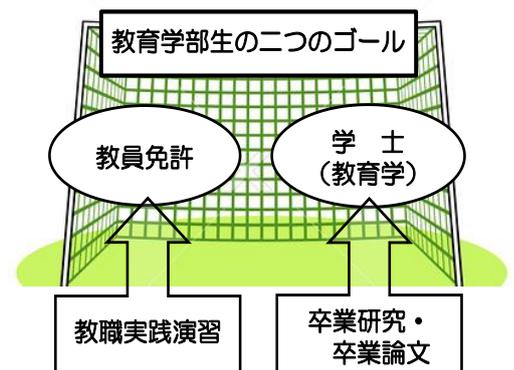
◆2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」より

教職実践演習は、教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

このようにこの科目は、教職課程における全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものです。

【教職実践演習の履修に必要なこと】

- 1) 卒業要件となっている教員免許の取得に必要な科目を履修済みであること。
- 2) 「教職カルテ」を構成する、科目ごとの授業リフレクションシートや自己成長評価シート等を、基本的に半期ごとに記載（入力）してあること。
- 3) 教職実践演習のクラスによっては、4年次前学期開講「教職実践研究」の履修を前提とする場合があるので、このガイドブックを参考に確認すること。



※本冊子の25・26ページに教職実践演習登録のためのチェックリストがあります

教職実践演習の実施に関するガイドライン

2014（平成26）年7月25日

本学における教職課程の整合性を確保するために、
教職実践演習の各クラスは以下の共通認識にもとづいて実施するものとする。

I. 教職履修カルテについて

1. 教職履修カルテは、授業リフレクションシートと自己成長評価シートを必須とし、教職課程を履修するなかで作成・利用した資料等を整理しファイリングしたものを必要に応じて準備する。
2. 授業リフレクションシートは、直前の学期で履修した免許関連科目について、それぞれの習得内容等を記す。免許関連科目とは、「教育職員免許法施行規則」に定められた科目に対応する本学の開設科目をさす。
3. 自己成長評価シートは、直前の年度までの「教員としての資質」の獲得状況について、授業で修得した知見および授業外で得た知見などを総合的に勘案して自己評価する。なお、最終回の自己評価は、教職実践演習の終了時に行う。
4. 教職履修カルテは、教職実践演習時における履修履歴の省察で活用するためのものであって、学生の自己評価を当該授業の成績評価に流用することはできない。

II. 登録について

1. 1つ以上の教員免許について教育職員免許法上の免許取得要件となる科目群を履修済みで、かつ教職履修カルテを準備してある学生に対して、教職実践演習の所定のクラスに登録を認める。
2. 1つ目の免許の教育実習等（養護実習・養護実践演習・栄養教育実習などを含む）の日程上の都合によって後学期登録までに教育実習等の成績判定が間に合わない学生については、学期はじめに登録を受け付けるが、教育実習等の判定が「F（不可）」となった段階で教職実践演習の登録を解除する。
3. 登録の可否は教職課程認定の単位である各学部で判断するものとする。
4. 本学の在学生ではない者が教職実践演習を科目等履修することの可否は各学部で判断するが、上記第Ⅱ－1項の登録条件を満たしていなければならない。

III. 授業の目標や計画について

1. シラバスの「達成目標」欄には、学士教育プログラムの「学習教育目標」との対応関係ではなく、この科目固有の達成目標をキーワードで列挙する。
2. 各クラスは、教職履修カルテを活用した省察および補完指導をその授業内容の一部として盛り込む。
3. 学士課程教育のディプロマ・ポリシーとの共存をはかるために、クラス運営にあたっては卒業研究・卒業論文の営為と両立できるよう可能なかぎり配慮する。
4. 現職教諭等（教職経験者を含む）や学外機関への協力依頼は、各クラスの責任において内諾等を取りつけ、それらをふまえたうえで全学的に集約し教職課程統括責任者（理事等）が正式な依頼手続きを行う。
5. 教職実践演習の各クラスにつき、事前に申請された場合にかぎり、外部協力者依頼経費として非常勤講師手当10時間相当分を上限として各学部に分配する。

IV. 成績判定について

1. 教職実践演習それ自体は特定の学修成果の修得を目的としているのではなく、「教員として最小限必要な資質能力」を養成段階の最終局面で確認することが主たる目的であるから、成績判定の手段としては期末最終試験という方式はとらない。
2. 別添の評価基準表と教員用評価シートは、教員としての資質能力とされる4大項目を取り上げたものであるから、各クラスにおける成績判定の参考モデルとする。
3. 成績判定にあたっては、教職実践演習のクラスごとに担当者・協力者が十分な相互調整をして行う。

附 則 （省略）

教職実践演習と教職カルテに関する申し合わせ（改訂版）

2020（令和2）年1月

教育学部教務委員会

全学共通の「教職実践演習の実施に関するガイドライン」のほかに、教育学部においては以下の点に留意する。

1. 平成28年度以前に入学した学生は、教職実践研究（前期）と教職実践演習（後期）との合成による通年体制で行う。教職実践演習のそれぞれのクラスは、同クラスが指定する教職実践研究のクラスを履修済みでないと登録できない。
2. 平成29年度以降に入学する学生は、教職実践演習（後期）を履修する。同演習は専攻ごとに定められた達成目標に基づき、全専修が開設する。学生は同専攻内であれば所属専修以外の専修が提供するクラスを受講することが可能である。なお、クラスによっては、教職実践研究（前期）や特定の科目履修を条件とする場合がある。
3. 平成29年度以降に入学する学生に対して教務委員会は、開設クラスのシラバス（テーマ・開講形態・予定の担当スタッフ・実施内容・履修に必要な事前学習等）を「教職実践演習ガイドブック」として取りまとめ、履修の前年度中に提供する。
4. 教職実践演習の成績評価に際しては、「教職実践演習の評価基準表」に準じて行う。
5. 教職科目（教科指導法を含む）担当者と教科専門科目担当者との連携・協力でクラスを運営する。
6. 学生の教職カルテについて指導・助言するのは年次指導教員である。
7. 本学部卒業生にかぎり、かつ「教職実践演習の実施に関するガイドライン」の第Ⅱ-1項の登録条件を満たしている、希望クラスの担当責任者が了解した場合は、代議員会の議を経て教職実践研究および教職実践演習の科目等履修を認めることができる。

（備考）

2014（平成26）年7月16日、制定

2017（平成29）年3月15日、改正

2019（平成31）年3月27日、改正

2020（令和2）年1月15日、改正

教職実践演習の目標

教育学部における教職実践演習の目標は、
専攻ごとに下記のように設定されています。

学校教育専攻 共通

- ①教職の意義を理解し、教職への使命感を高める
- ②コミュニケーション力を含めた社会性を高める
- ③子ども理解力および学校・学級経営力を高める
- ④教育計画力および実践的指導力を高める
- ⑤時代の変化がもたらす新たな教育課題を意識しながら、学校教育を全体的にコーディネートすることができる

教科教育専攻（小学校教育コース・中学校教育コース）共通

- ①教職の意義を理解し、教職への使命感を高める
- ②コミュニケーション力を含めた社会性を高める
- ③子ども理解力および学校・学級経営力を高める
- ④教育計画力および実践的指導力を高める
- ⑤時代の変化がもたらす新たな教育課題を意識しながら、教科の専門性を生かしつつ児童生徒の資質・能力を育む教育活動を提案することができる

特別支援教育専攻

- ① 障がいのある児童生徒の成長に対する使命感と責任感を高める
- ② 障がいのある児童生徒に対する理解を深め、学習支援などに関する基礎的な能力を身に付ける
- ③ 特別支援教育に携わる教員として社会性を身に付け円滑な人間関係を構築し、適切なコミュニケーションを図る

評価基準表

評価項目	ウエイト	F	D	C	B	A
		Insufficient	Pass	Sufficient	Good	Excellent
I. 社会性や対人関係能力						
I a: 共通の目的・段取りなどを意識しながら、その場に係わる人々と適切にコミュニケーションできるか。						
I b: 実践内容およびその準備作業において、役割分担を調整しながら連携・協働することができるか。						
II. 教職としての Basic Factor						
II a: 児童・生徒に対して公平かつ誠実な態度で接し、個に応じた成長・発達を促す方向で対応することができるか。						
II b: 児童・生徒の学びや成長を促すために、積極性と責任感をもって教育実践を遂行できるか。						
III. 教科内容等の指導力						
III a: 教育内容に対する理解に基づいて、児童・生徒が興味・関心を持ち、かつスムーズに実行できるよう工夫された教材等を準備・提供できるか。また ICT を積極的に活用しているか。						
III b: 時間配分が適切で、発展的な活動への展開を視野に入れた計画を立て、適切に指導・評価できるか。						
IV. 子ども理解や学級経営等の能力						
IV a: 児童・生徒の多様な特徴に目配りして、どの程度まで対応可能かについての個人差を予測しながら指導助言できるか。						
IV b: 適切な発声(声量・抑揚等)、表情、身体動作などのスキルを用いて、集団を掌握しその動静をコントロールできるか。						
V. 省察による自己成長への姿勢 (教職カルテへの記入状況と内容)	20					
以上 I ~ V の合計	100					

評価基準表に関連する補足説明

(改訂版)

I. 教職実践演習の基本要件、趣旨、実施例など

1. 教科及び教職に関する科目履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認する。
2. 教職実践演習の担当教員と、その他の教科及び教職に関する科目の担当教員とで実施内容等について協議する。
3. 入学の段階からの各学生の学習内容およびその理解度等を把握し省察するために、学生に「教職カルテ」の作成を義務づける。
4. 授業内容に含めるべき必須要件は、教職カルテを活用した学修の振り返り、教職の意義や教員の役割や子どもに対する責任についての討議。
5. クラスの特性に応じて選択的に組み合わせる内容例は、教育現場とそれを取り巻く相互関係のあり方についての講義や討議、児童・生徒の理解や学級経営の難しさについての講義や討議、学級経営案の共同企画・作成、学校現場の見学・調査とそれについての討議、模擬授業の企画・準備・実施、等々。
6. 教職カルテを活用した振り返りや演習時の受講状況を勘案して、個々の学生ごとに必要な補完指導を行う。

II. 評価基準表についての留意点

1. この授業の達成目標は、これまで学んできたことに基づいて、現実の実践（またはそれを想定した模擬実践）で適用できるかどうかを試行錯誤しながら企画・調整・実施し、上手くいったことと上手くいかなかったことを相互に点検しながら、それらの問題点や可能な改善策を展望するなかで、教員としての最小限の力量を見極めることにある。
2. ウェイト（％）の配分は、合計が100になるよう、Ⅰ～Ⅳ項に関してはクラスの特性に応じて柔軟に強弱を工夫するが、Ⅴ項に関しては全クラス共通に20とする。
3. ウェイトを20に固定したⅤ項は、教職カルテへの記入、内容、および活用状況を評価するためのものである。教職カルテへの記入は教職実践演習の登録要件になっていることも踏まえ、4年間を通して、①記入期限を守っているか、②記入内容が適切であるか、③自己評価と省察をきちんと行っているか、などについて総合的に評価する。
4. 各項目Ⅰ～Ⅳの小項目aとbはすべて評価対象にする必要はないが、aまたはbのいずれかは評価対象としてウェイトを付ける。
5. 評価基準表を毎回の授業で使用するか、一定回数ごとに使用するか、あるいは最終段階で使用するかは、各クラスの判断による。
6. 評価基準表には、クラスの特性に応じて独自の第Ⅵ項を設けることができる。

2023（令和5）年度

教育学部開設

教職実践演習シラバス一覧

- 教職実践演習は、自分が属する「専攻」内であれば、所属専修提供以外のクラスを受講することが可能です。
- シラバスをよく読み、特に他専修提供クラスを受講を希望する場合には、事前に当該クラスの担当予定教員に相談するようにしてください。
- 都合によりシラバスの一部（授業計画等）を変更することがありますので、新年度に公開されるWEBシラバスも必ず確認してください。
- この科目を履修するためには「学生便覧」および「教員免許状取得の手引」に記載された免許取得に必要な科目を全て履修済みである必要があります。

シラバス1 教職実践演習（1組）

提供専修	小学校教育コース 学校教育専攻 教育実践学専修
テーマ	附属小学校で授業づくりと授業改善を学ぶ
授業内容と方法	<p>本授業では、授業づくりを中心に、子ども理解、教科内容に関する知識・技能、課題探求力、教職に求められる教養、ICT 活用力といった教師に求められる資質・能力について、学生一人一人が自分自身のこれまでの学びを振り返り、教員養成の最終段階において自らに不足している知識・技能や経験を補い、教員になる上で自分にとって何が課題であるかを自覚することを目的としている。</p> <p>具体的には、(1) 教職カルテを用いた自己分析と課題の確認、(2) 道徳と総合的な学習の時間の授業を通して、教材分析、授業づくり、授業の実際についての理解をさらに深める、(3) 授業後のリフレクションを通して授業改善のための批判的視点を獲得する、(4) 模擬授業を通して自分の授業力を再確認する。</p>
履修条件	前期開講の「教職実践研究」を履修し、教職実践演習に関わるガイダンスを受けていることを条件とする。
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション（本科目の趣旨と進め方、ならびに評価方法）</p> <p>第2回 教職カルテを用いた自己分析と新たな課題について</p> <p>第3回 教師に求められる資質・能力について（全体でのリフレクション）</p> <p>第4回 道徳教材の分析（内容項目：「親切、思いやり」）</p> <p>第5回 「親切、思いやり」の道徳授業観察と授業者を交えたリフレクション</p> <p>第6回 道徳教材の分析（内容項目：「規則の尊重」）</p> <p>第7回 「規則の尊重」の道徳授業観察と授業者を交えたリフレクション</p> <p>第8回 総合的な学習の時間の授業づくり（国際理解）</p> <p>第9回 国際理解をテーマにした総合的な学習の時間の授業参観と授業者を交えたリフレクション</p> <p>第10回 総合的な学習の時間の授業づくり（環境）</p> <p>第11回 環境をテーマにした総合的な学習の時間の授業参観と授業者を交えたリフレクション</p> <p>第12回 模擬授業（道徳、ICT の活用を含む）</p> <p>第13回 模擬授業（総合的な学習の時間、ICT の活用を含む）</p> <p>第14回 附属小学校教諭による講話</p> <p>第15回 まとめと総括</p>
事前学習	教職カルテ（授業リフレクションシート、自己成長評価シート）の整理をおこない、教職にむけての課題を整理しておくこと。
事後学習	履修を通しての学びの成果と課題を整理すること。
連絡先 (担当予定教員)	上地完治（kanji@edu.u-ryukyu.ac.jp）
備考	

シラバス2 教職実践演習（2組）

提供専修	小学校教育コース 学校教育専攻 教育実践学専修
テーマ	公立学校（小規模校・複式学級）で学ぶ
授業内容と方法	<p>沖縄県の地域的・現代的教育課題を踏まえて、公立小学校（小規模校・複式学級）において、学校教育を構成する諸活動へ通じて継続的且つ能動的に関わる。</p> <p>一人ひとりの児童の成長及び学びの変化を直に感じ把握し捉え、それに基づき関わりを違えていく「教師及び教職のあり方」を学ぶ。</p> <p>それに向けて教職カルテなどの資料を用いて、教育実習を始めとする自らの教育現場体験を振り返り、培ってきた授業構想力、教材研究力、ICT活用力、同僚との協調性などについて点検する。</p>
履修条件	<p>前期開講の「教職実践研究」を履修し、教職実践演習に関わるガイダンスを受けていることを条件とする。尚、本科目は単学級または完全複式学級からなる小規模校において実習形式で実施するため、宿泊を含む参加が可能であることが条件となる。</p>
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション（本科目の趣旨と進め方、ならびに評価方法）</p> <p>第2回 教職カルテの相互点検・課題の検討</p> <p>第3回 受け入れ校訪問・学校および学級経営について校長講話</p> <p>第4回 担当学級での観察</p> <p>第5回 学校行事（運動会）の体験活動準備</p> <p>第6回 学校行事の体験活動</p> <p>第7回 学校行事の体験活動・振り返り・まとめ</p> <p>第8回 授業構想ならびに教材研究について担当教員の指導</p> <p>第9回 授業実践準備</p> <p>第10回 授業実践（ICTの活用を含む）</p> <p>第11回 担当教員を含む授業実践の省察</p> <p>第12回 活動全体のまとめとふりかえり</p> <p>第13回 各自の活動について相互報告</p> <p>第14回 活動の総括（成果と課題）</p> <p>第15回 最終発表会</p>
事前学習	<p>教職カルテ（授業リフレクションシート、自己成長評価シート）の整理をおこない、教職にむけての課題を整理しておくこと。</p>
事後学習	<p>履修を通しての学びの成果と課題を整理すること。</p>
連絡先 (担当予定教員)	<p>辻雄二（ytsuji@edu.u-ryukyu.ac.jp）</p> <p>塚原健太（tkenta@edu.u-ryukyu.ac.jp）</p>
備考	

シラバス3 教職実践演習（3組）

提供専修	小学校教育コース 学校教育専攻 教育実践学専修
テーマ	離島へき地校における授業づくりを中心とした実習
授業内容と方法	<p>本授業は、離島へき地校における学級運営ならびに授業実施を計画策定し、実際に1週間の実習を通じて、教員として必要な知識技能の習得を確認するものである。具体的には、西表島の小学校をフィールドとして授業観察と研究授業を実施する。学校現場における現場教員とのリフレクション、大学教員、学生同士のリフレクションを通じ、教育実践力（ICT 活用力を含む）についての評価を実施できるようにする。</p> <p>離島へき地校の具体的な決定は、前期中に提案・調整のうえ決定する。10 月中に西表島の各小学校（古見小学校、白浜小学校）にて開催する。受け入れ校の調整のため、前期オリエンテーションにて仮登録を行ったものが本登録するものとする。</p>
履修条件	<p>前期開講の「教職実践研究」を履修し、教職実践演習に関わるガイダンスを受けていることを条件とする。また、小学校を中心とした実習のため、小学校教員への高い希望をもっているものを優先する。そのうえで離島へき地教育に関して高い関心と志をもつ学生の受講を希望する。これまで離島へき地教育概論、へき地認識演習など離島教育に関する科目を受講していることが望ましい。</p>
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション（授業の趣旨、標準評価方式などの確認）</p> <p>第2回 教職カルテの相互点検，課題の検討</p> <p>第3回 離島へき地実習にむけた学級経営計画</p> <p>第4回 現地での実習にむけた討議</p> <p>第5回 授業の主旨，評価方法の確認</p> <p>第6回 具体的活動計画の確認</p> <p>第7回 離島へき地校学校における学級観察</p> <p>第8回 離島へき地校学校における授業計画</p> <p>第9回 中間総括</p> <p>第10回 課題発見，リフレクション</p> <p>第11回 離島へき地校学校における研究授業（ICT の活用を含む）</p> <p>第12回 離島へき地校学校における研究授業の検討</p> <p>第13回 離島へき地校学校における実習のリフレクション</p> <p>第14回 総括と反省</p> <p>第15回 最終報告会</p>
事前学習	<p>教職カルテ（授業リフレクションシート、自己成長評価シート）の整備し、教員になるために自身の課題を明らかにしておく。そのうえで自身がとりくみたい点を明らかにする。</p>
事後学習	<p>実習の振り返りから見えた自身の課題を卒業研究、これから教員として働くうえでの課題として整理する。</p>
連絡先 (担当予定教員)	<p>山口剛史 (t-yama@edu.u-ryukyu.ac.jp)</p> <p>松本由香 (mayuka@edu.u-ryukyu.ac.jp)</p>
備考	

シラバス4 教職実践演習（4組）

提供専修	小学校教育コース 学校教育専攻 教育実践学専修
テーマ	教職カルテをもとに模擬授業を行い小学校の授業づくりを学ぶ
授業内容と方法	本授業では以下のことを行う。(1)教職カルテで自己分析と課題の検討を行う。(2)言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力など学習の基盤となる資質・能力を育成する授業について復習する。(3)上記(1)と(2)を踏まえて、ICT活用を含めた授業案の作成と模擬授業を行う。(4)授業後に授業案と模擬授業について全員で討議する。
履修条件	前期開講の「教職実践研究」を履修し、教職実践演習に関わるガイダンスを受けていることを条件とする。
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション（本科目の趣旨と進め方、ならびに評価方法）</p> <p>第2回 教職カルテの相互点検・課題の検討</p> <p>第3回 学習の基盤となる資質・能力を育成する授業について、模擬授業案の作成</p> <p>第4回 模擬授業案の作成</p> <p>第5回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第6回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第7回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第8回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第9回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第10回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第11回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第12回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第13回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第14回 模擬授業の実施と討議</p> <p>第15回 まとめと総括</p>
事前学習	教職カルテ（授業リフレクションシート、自己成長評価シート）の整理と、「授業内容と方法」に記載した”学習の基盤となる資質・能力を育成する授業”について見直しておくこと。
事後学習	履修を通しての学びの成果と課題を整理すること。
連絡先 (担当予定教員)	田場あゆみ (ayumi@edu.u-ryukyu.ac.jp)
備考	

シラバス5 教職実践演習（5組）

提供専修	小学校教育コース 学校教育専攻 子ども教育開発専修
テーマ	活力ある「学校現場」の実現をめざして
授業内容と方法	受講生は、各自の「教職カルテ」をふまえた相互討論によって学びの履歴のポイントをまとめ、それをもとに、学校現場同様場面に関わる活動を行う。学校現場同様場面では、教育実習における研究授業検討会場面を設定し、ICTを活用しながら演習を行う。受講生は本科目の趣旨に応じて分担する各役割を果たし、活力ある「学校現場」の実現にとって必要なことを確認し合い、補強し合う。最終発表会では、それぞれの学校現場同様場面での学びを発表し合い、全体での理解を深め、教員として必要な資質能力を確認する。
履修条件	子 303「授業デザイン演習」を履修済であること。
授業計画	<p>第 1 回 授業の趣旨(とくに教員像との関連)、標準評価方式などの確認（全体）</p> <p>第 2 回 教職カルテの相互点検、課題の検討（全体）</p> <p>第 3 回 演習の目標と実施概要についての討議</p> <p>第 4 回 役割分担と実施方針についての討議</p> <p>第 5 回 実施計画の策定</p> <p>第 6 回 策定した実施計画の再点検</p> <p>第 7 回 学校現場同様場面演習(1) (ICTの活用を含む)</p> <p>第 8 回 学校現場同様場面演習(2) (ICTの活用を含む)</p> <p>第 9 回 学校現場同様場面演習(3) (ICTの活用を含む)</p> <p>第 10 回 中間総括：反省と課題</p> <p>第 11 回 学校現場同様場面演習(4) (ICTの活用を含む)</p> <p>第 12 回 学校現場同様場面演習(5) (ICTの活用を含む)</p> <p>第 13 回 学校現場同様場面演習(6) (ICTの活用を含む)</p> <p>第 14 回 総括と反省</p> <p>第 15 回 最終報告会（全体）(ICTの活用を含む)</p>
事前学習	琉球大学の評価基準表に基づき、事前学習を十分に行うこと。
事後学習	琉球大学の評価基準表に基づき、事後学習を十分に行うこと。
連絡先 (担当予定教員)	<p>kiichi@edu.u-ryukyu.ac.jp（岡花）</p> <p>okamoto@edu.u-ryukyu.ac.jp（岡本）</p> <p>minakot@edu.u-ryukyu.ac.jp（高橋）</p> <p>tatsuma@edu.u-ryukyu.ac.jp（中尾）</p> <p>yukitaka@edu.u-ryukyu.ac.jp（西村）</p> <p>hirose@edu.u-ryukyu.ac.jp（廣瀬）</p> <p>rmiyagi@edu.u-ryukyu.ac.jp（宮城）</p> <p>fullmoon@edu.u-ryukyu.ac.jp（望月）</p> <p>imais@edu.u-ryukyu.ac.jp（今井）</p>
備考	

提供専修	小学校教育& 中学校教育コース 教科教育専攻 国語教育専修
テーマ	「カルチャースクール by 琉大国語科」を企画・運営しよう
授業内容 と方法	<p>受講学生それぞれが自らの卒業研究（基本的に卒業論文を意味する）の題材をもとに、「カルチャーセンターの講師」を務めるつもりで一人1講ずつ責任をもって担当する「カルチャースクール by 琉大国語科」を、2022年2月上旬に実施する。</p> <p>「スクール受講者に専門的な話をわかりやすく伝える」ためには、卒業論文を執筆するために必要なスキルとは異なるスキルが求められ、それはまさに教師に必要なスキルと通じ合っている。たとえば、「わかりやすく伝える」ための「話す」技術や「レジメを作成する」技術、スクールの宣伝するためのチラシやポスター作成等の工夫、スクール受講者が気持ちよく受講できるような環境作りへの配慮、ICT活用力、などである。そういった一連の企画・運営を学生主体で行う。カルチャースクールの聴講者は、国語教育専修1～3年次生のほか、卒業研究の内容によっては附属小中学校等近隣学校の児童・生徒に声をかけるなど、学生どうして話し合っで決める。</p> <p>先輩たちの実施は参考にしてほしいが、それをすべて踏襲するのではなく、良いところは取り入れ、改善すべき点は改めて、自分たち主体の実施を目指してほしい。</p>
履修条件	2024年1月末日時点で卒業論文を指導教員に提出し終えていること。
授業計画	<p>第1セクション</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) オリエンテーション（目的と概要、評価規準やICT活用方法の確認など） 2) 教職カルテを基にした各自の履修状況の課題と対策 3) 昨年度のカルチャースクール（先輩が実施）についてのリフレクション 4) 卒業研究の進捗状況の確認 <p>第2セクション</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 卒業研究（卒業論文）の完成と総括 2) カルチャースクールの計画と準備 <p>第3セクション</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) カルチャースクールの案内と実施（ICTの活用を含む） 2) カルチャースクールの総括
事前学習	教職カルテ（授業リフレクションシート、自己成長評価シート）の整備をしながら、しっかりと卒業研究（卒業論文）に取り組むとともに、そこから何を抽出して「カルチャースクール」を開催するかを考えておく。
事後学習	それぞれの実施を振り返り、次年度以降に実施する後輩の参考になるような資料やノウハウを残す。
連絡先 (担当予定教員)	高瀬裕人 (tyujin@edu.u-ryukyu.ac.jp) 萩野敦子 (hagino@edu.u-ryukyu.ac.jp)
備考	

シラバス7 教職実践演習（7組）

提供専修	小学校教育& 中学校教育コース 教科教育専攻 社会科教育専修
テーマ	琉球大学教育学部附属中学校社会科教師の教育・研究の営みを学ぶ
授業内容 と方法	附属学校で、社会科授業の「みとり」、教材開発、こども支援、ICT 活用など教師の仕事について学び、その学びの記録を報告し、担当教師の指導を受け、担当教員が評価する。
履修条件	社会科教育研究または社会科教育法を履修済みの学生
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 , オリエンテーションは学部教員と連携し附属中教員が行う。 2 , 期間は 10 月初旬卒論中間報告会後から 11 月の教育研究発表会までとする。 3 , 授業における個々の生徒の「みとり」、授業のための教材開発、子ども支援等について学級づくり授業づくりのための教師の仕事を学んでいくことになるが、教師の営みの何を学ぶかについての詳細は担当の附属中の教師と相談してきめていくこととする。 4 , 学んだことは次の日までに指導担当教員に文章で具体的に報告し、指導を受ける。問題が起きた場合についても教員にその都度報告する。 5 , 附属中における学びは、授業への参加時間、授業準備や報告作成等の時間をすべて含めては 22.5 時間以上を予定している。報告書には学びの時間も明記することとする。 6 , 評価は報告書に基づき指導担当教員が行う。 7 , 上記の学習においては、 teams など ICT の活用をはかり推進する。
事前学習	<ol style="list-style-type: none"> 1 , オリエンテーションまでに、教職カルテを整理し、教員養成科目での学びを整理しておくこと。 2 , 附属中学校のカリキュラム（教育計画）、前年度までの研究紀要を、よく学んでおくこと。
事後学習	附属中で学んだことをふりかえり確認し、事前学習を踏まえて、報告書をその都度作成し、担当教員へ報告すること。
連絡先 (担当予定教員)	<p>北上田 源（ kitaueda@edu.u-ryukyu.ac.jp ）</p> <p>小屋敷 琢己（ sonic999@edu.u-ryukyu.ac.jp ）</p> <p>附属中との連携は上記の社会科教育講座社会科教育担当者と4 年年次指導教員で行う。ただし、指導担当は社会科教育教室全員が分担して行う。</p>
備考	社会科教育講座は毎年教職実践演習に関する公文を附属中校長宛に発送するものとする。受講生の人数および附属中学校の受け入れ体制によっては内容を変更する可能性もあり、その際は受講予定者に別途連絡するものとする。

シラバス8 教職実践演習（8組）

提供専修	小学校教育& 中学校教育コース 教科教育専攻 数学教育専修
テーマ	自己の課題を踏まえた教職実践の構想
授業内容 と方法	教職カルテの振り返りを踏まえ、教職に就くにあたって自己の課題や興味・関心等を明らかにする。明らかにした自己の課題や興味・関心等の中から、ICTを活用して取り組める課題を選び、教材や授業、その他の教職実践等を構想し、その発表や実践、討論を通して実践的指導力等の向上をはかる。
履修条件	教職実践演習の履修条件を満たしていること
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション（授業の主旨などの確認）</p> <p>第2回：教職カルテの点検，課題の検討</p> <p>第3回：実施計画の策定</p> <p>第4回：学校現場同様場面演習の準備（1）（ICTの活用を含む）</p> <p>第5回：学校現場同様場面演習の準備（2）（ICTの活用を含む）</p> <p>第6回：学校現場同様場面演習の準備（3）（ICTの活用を含む）</p> <p>第7回：学校現場同様場面演習（1）（ICTの活用を含む）</p> <p>第8回：学校現場同様場面演習（2）（ICTの活用を含む）</p> <p>第9回：学校現場同様場面演習（3）（ICTの活用を含む）</p> <p>第10回：学校現場同様場面演習（4）（ICTの活用を含む）</p> <p>第11回：学校現場同様場面演習（5）（ICTの活用を含む）</p> <p>第12回：学校現場同様場面演習（6）（ICTの活用を含む）</p> <p>第13回：学校現場同様場面演習（7）（ICTの活用を含む）</p> <p>第14回：学校現場同様場面演習（8）（ICTの活用を含む）</p> <p>第15回：総括</p>
事前学習	教職カルテ（授業リフレクションシート、自己成長評価シート）の整備
事後学習	講義リフレクションを担当教員に送る（webclassまたはメール）。
連絡先 (担当予定教員)	徳重 典英（hide@edu.u-ryukyuu.ac.jp）
備考	

シラバス9 教職実践演習（9組）

提供専修	小学校教育& 中学校教育コース 教科教育専攻 理科教育専修
テーマ	科学イベント「クリスマスサイエンスレクチャー」を企画・運営しよう
授業内容 と方法	教職カルテをもとに、これまでの教職課程の履修内容について自己点検やグループでの相互点検を通して省察を行い、教員になる上で自己にとって何が課題であるのかを明らかにする。また、児童・生徒を対象にした科学イベントの企画・運営に携わることによって、行事等の企画・運営能力や実践的指導力、ICT活用能力等の向上を図る。
履修条件	理科教材研究及び理科実践研究を履修済みが望ましい。
授業計画	<p>第1回：ガイダンス（今後の授業計画と教職実践演習の意義について）</p> <p>第2回：教職カルテの自己点検（これまでの教職履修の振り返り）</p> <p>第3回：教職カルテの相互点検・課題の検討（グループ討議）</p> <p>第4回：教職カルテの相互点検・課題の検討（発表）</p> <p>第5回：科学イベントの準備1</p> <p>第6回：科学イベントの準備2</p> <p>第7回：科学イベントの準備3</p> <p>第8回：科学イベント予行演習・振り返り1</p> <p>第9回：科学イベント予行演習・振り返り2</p> <p>第10回：科学イベント予行演習・振り返り3</p> <p>第11回：科学イベントの最終準備・確認</p> <p>第12回：科学イベントの実施1（ICTの活用を含む）</p> <p>第13回：科学イベントの実施2（ICTの活用を含む）</p> <p>第14回：科学イベントの実施3（ICTの活用を含む）</p> <p>第15回：取り組みの反省（グループ討議）・まとめ</p>
事前学習	本授業の趣旨に鑑み、広く関連する文献、活動（結果）の探索、理解に努める。
事後学習	教員にとって必要な実践的指導力向上を目的に、具体的な行事の企画・運営を経験するが、その結果を受けての改善策を見出すべく、関連活動の探索、理解に努める。
連絡先 (担当予定教員)	濱田 栄作（e-hamada@edu.u-ryukyu.ac.jp）他
備考	科学イベントについては、児童・生徒が参加しやすい土日等に実施する予定である。日程については、第1回の授業時に連絡する。

シラバス10 教職実践演習（10組）

提供専修	小学校教育コース&中学校教育コース 教科教育専攻 音楽教育専修
テーマ	児童・生徒と協働的につくる音楽表現の場
授業内容 と方法	学校現場においては、音楽を介した教育的な場が多様に存在する。それゆえ、学校教員は授業以外の教育課程の様々な場面で、音楽的な実践力や教育力を発揮することが求められる。音楽を介した教育的な場の例として学習発表会や音楽会がある。このような場では、クラスや学年、場合によっては異年齢集団で協働的に一つの作品や演奏を創り上げることから、多様な他者と協働する機会となる。そこで、この組を履修する学生には、実際の児童・生徒と共に協働的に音楽表現を創り上げ、その成果を音楽教育専修が年度末に開催している音楽科発表会で公開してもらおう。どのように子どもと音楽表現を作り上げていくとよいか、そのような過程にどういった教育的意義があるかを考えながら、プロジェクトとして児童・生徒と協働的に音楽表現を創り上げていく過程を経験しそれを省察的に考察することを通して、教員として必要な資質・能力（多様で異質な他者と意欲的に関わり協働する力、教材研究及び教材理解を深める力、ICTの活用を含む適切な教育活動を構想し実践する力、子どもを理解し適切に関わる力等）を身につけていく。
履修条件	「教職実践研究」（音楽科専門科目）を履修済みで教職実践演習の履修条件を満たしていること。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス（科目趣旨・授業計画） 2. 小中学校における学校行事と音楽科教員の役割 3. 音楽科発表会の意義について 4. 児童・生徒と協働するプロジェクトの提案（ICTの活用を含む） 5. 児童・生徒と協働するプロジェクトの検討（ICTの活用を含む） 6 & 7 児童・生徒との協働による音楽表現①（ICTの活用を含む） 8 & 9 児童・生徒との協働による音楽表現②（ICTの活用を含む） 10& 11 児童・生徒との協働による音楽表現③（ICTの活用を含む） 12& 13 児童・生徒との協働による音楽表現④（ICTの活用を含む） 14. 音楽科発表会のプログラム原稿の作成 15. 学校行事における子どもの学び（最終レポートの提出）
事前学習	毎回の授業課題に関する準備を行う
事後学習	授業で作成したプロジェクト案やプロジェクト関係資料等をteamsのフォルダに提出し、適宜レポートを提出する。
連絡先 (担当予定教員)	小川由美 y_mi-o@edu.u-ryukyu.ac.jp 崎山弥生 yayoi-s@edu.u-ryukyu.ac.jp 村田昌己 sonta79@edu.u-ryukyu.ac.jp 持松朋世 tomochi@edu.u-ryukyu.ac.jp
備考	音楽的指導力と歌唱及び器楽演奏に関する技能を必要とするので、他専修学生が履修を希望する際には、初回授業に必ず出席しガイダンスを聞いた後に受講するか否かを判断すること。

提供専修	小学校教育コース&中学校教育コース 教科教育専攻 美術教育専修
テーマ	展覧会をつくる
授業内容と方法	<p>美術教育専修の学生は卒業研究として美術作品の制作（又は論文の執筆）を行い、その成果は審査を経て2月上旬開催の卒業展で一般公開される。本授業では卒業展という卒業研究の晴れ舞台となる展覧会を、受講生が主体となって企画し、開催に向けてつくり上げていく。</p> <p>展覧会を開催するためには、例えば「展示空間の中で作品意図を分かりやすく示すには、どのような工夫や配慮が必要なのか」という表現に直接関わる事柄から、「出展者同士の意思疎通や合意はどのように形成されるべきなのか」という二次的な事柄に至るまで、取り組むべき内容は多岐にわたる。こうした展覧会づくりを企画段階から体験することは、客観的な立場に立ちながら自己と他者をより深く理解できる貴重な学習機会といえるだろう。そこでは創造性の他に、柔軟な社会性や対人関係能力も必要となる。</p> <p>各々の自由な発想による研究内容を社会に向けてアプローチするには、どのようなことが大切なのか。本授業を通して考えていきたい。</p>
履修条件	<p>美術作品の制作や発表活動、展覧会企画に高い関心を有すること。</p> <p>美術教育専修夏季展覧会（琉大祭の期間に開催予定）を鑑賞済みであること。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1：オリエンテーション 2：展覧会の企画について 3：展覧会場の展示構成について 4：展覧会の広報物について（ICTの活用を含む） 5：展覧会の記録資料について（ICTの活用を含む） 6：展覧会の広報活動について（ICTの活用を含む） 7：展覧会場の掲示物及び配布資料について 8－12：出展作品の搬入及び展示作業（2月上旬） 13－14：出展作品の搬出作業（2月中旬） 15：総括（2月中旬）
事前学習	各出展者の研究内容、展示内容に関するリサーチ
事後学習	各出展者の研究内容、展示内容に関するサポート
連絡先 (担当予定教員)	<p>吉田悦治 (etsuji@edu.u-ryukyu.ac.jp)</p> <p>亀井洋一郎 (y-kamei@eve.u-ryukyu.ac.jp)</p>
備考	

シラバス 12 教職実践演習（12組）

提供専修	小学校教育コース&中学校教育コース 教科教育専攻 保健体育専修
テーマ	より深く、より広い視野で体育授業を見つめよう
授業内容と方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教職カルテの自己点検及び教職に対する自己の課題の把握する 2. 教育実習等の実践を振り返り課題を挙げ、グループ討論を行い、課題解決の討論を踏まえ、自己の学習指導を修正する 3. 現職教師の講話をもとに、自己の目指す教師像をさらに具体化する 4. 教材研究や運動学習を多面的にとらえるために社会教育体験を行う 5. ICTの活用を含む学校現場同様場面演習を行い、養成段階卒業時点における教師に必要な資質・能力（ICTの活用力を含む）を身につける
履修条件	教職実践演習の履修条件を満たしていること
授業計画	<p>第1回：講義の目的、標準評価方式などの確認</p> <p>第2回：教職実践の省察から自己の課題を確認する</p> <p>第3回：教職実践における課題について討論①</p> <p>第4回：教職実践における課題について討論②</p> <p>第5回：学校現場における課題について討論</p> <p>第6回：現職教師による講話①、実践の課題を修正し、自己の課題を再確認する</p> <p>第7回：社会における体育・スポーツの役割</p> <p>第8回：社会教育体験①</p> <p>第9回：社会教育体験②社会教育体験の省察</p> <p>第10回：教材づくり</p> <p>第11回：学校現場同様場面演習①（ICTの活用を含む）</p> <p>第12回：学校現場同様場面演習②（ICTの活用を含む）</p> <p>第13回：現職教師による講話③</p> <p>第14回：現職教師による講話④</p> <p>第15回：総括</p>
事前学習	教職カルテ（授業リフレクションシート、自己成長評価シート）の整理をおこない、教職にむけての課題を整理する。
事後学習	グループ討議により、自らの考えを再考したものをまとめ、記録する
連絡先 (担当予定教員)	江藤真生子（emakiko@edu.u-ryukyu.ac.jp） （他保健体育専修教員）
備考	<p>○学校現場の状況や課題を理解するために、現職教師（3名）による講話を行う。</p> <p>○社会教育体験として、障がい者スポーツイベントへのボランティア参加を行う。（感染症等の状況により大会参加ができないときは、模擬授業等に置き換えることがある）</p>

シラバス 13 教職実践演習 (13組)

提供専修	小学校教育& 中学校教育コース 教科教育専攻 技術教育専修
テーマ	ものづくりを通して実践的な連携ができる教員になろう!
授業内容 と方法	本講義は、1.農業高校・水産高校の見学及び実習、2.ICT を活用した放課後クラブ等地域の子供達を対象とした実践、3.ICT を活用した科学教室の運営から構成される。1.は新学習指導要領から中学校技術科で必修となる飼育の授業について、各地域にある農業高校や水産高校との連携を視野に入れた授業実践のための演習、2.は小学校に隣接する放課後クラブ等地域の子供達を対象とした教室企画・運営を通して、教育委員会や保護者との連携について考える演習、3.は沖縄県青少年科学作品展における科学教室ブース企画・運営を通して、小学校から高校までの児童生徒や保護者、学校現場教員と交流することで、現場のニーズや課題を把握し、得られた知識・技能を自身の教員生活に活かす演習とする。2.と3.については、教室の企画から準備、運営すべてを受講者全員で協力・工夫して行う。準備に必要な工作機械や工具などは技術教育専修教員の協力を得ることが可能である。4 年間で学んだ教育技術・専門知識・専門技術を思う存分発揮できる演習である。
履修条件	本講義と「卒業研究Ⅱ」以外の卒業要件を満たしていること
授業計画	第1回 教職カルテの点検、自分の求める教員像、評価方式などの確認 第2回 農業高校 [11 月前半・農学部と合同] ・水産高校の見学[12 月上旬] (飼育設備の確認、農業・水産高校教員との交流) 第3回 農業・水産高校との連携を視野に入れた飼育の授業指導案作成 第4回 放課後クラブ支援や工作教室(12 月までの間に最低1 回実施)の 準備 1(授業計画・予算確認) 第5回 放課後クラブ支援や工作教室の準備 2(材料調達・作業分担等) 第6回 放課後クラブ支援や工作教室の準備3 (教材準備・マニュアル作成等) 第7回～第8回 放課後クラブ支援や工作教室の運営(ICT 活用) 第9回 科学教室(2 月中旬の土日)の準備1 (授業計画・予算確認) 第10回 科学教室(2 月中旬の土日)の準備2 (材料調達・作業分担) 第11回 科学教室(2 月中旬の土日)の準備3 (教材準備・マニュアル作成等) 第12回～第14回 科学教室(2 月中旬の土日)の運営(ICT 活用) 第15回 総括と自己評価
事前学習	第1回で教職カルテの自己成長評価シートをもとに目標設定を各自で行います(提出)。リフレクションシート等カルテの記入漏れがないように準備してください。
事後学習	製作した教材や資料等は電子データに整理して提出すること。
連絡先 (担当予定教員)	岡本牧子 (makiko_y@edu.u-ryukyu.ac.jp) 小野寺清光 (onodera@edu.u-ryukyu.ac.jp)
備考	2022 年度は新型コロナの影響で、1. 北部農林高校見学、沖縄水産高校見学・実習、工業高校教員講話、指導案作成 2.3. 浦添市教育委員会プログラミングワークショップを実施。

シラバス 14 教職実践演習 (14組)

提供専修	小学校教育& 中学校教育コース 教科教育専攻 生活科学教育専修
テーマ	「一日ものづくり楽校」を運営して生活力を育んでいこう!
授業内容 と方法	<p>教員養成最終段階を意識し、これまで作成した教職カルテ等の振り返りを通して自身の教師像を踏まえた課題の確認を行い、自己目標を設定し課題解決を目指す。</p> <p>課題解決に向け、受講生で「一日ものづくり楽校」を組織運営し、家庭科の学習内容の指導実践を通して取り組んでいく。大学近郊の小学校や児童センター等に協力頂き、小学校高学年の児童及び生活科学教育専修1～3年次等を対象とした「一日ものづくり楽校」を開講・運営する。尚、授業実践に際しては、ICTの活用にも取り組むこととする。</p> <p>受講生は自身の課題解決に向けて、See - Plan - Do - Seeの流れに基づいた課題解決学習を行い、担当する授業や楽校運営に主体的に取り組むことを期待する。</p>
履修条件	教職実践演習の受講条件（教職カルテの提出を含む）を満たしていること。また、家庭科に関する知識や技能を通して、自身の課題解決に主体的に取り組めること。
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション（目的と概要、評価規準や方法の確認など）</p> <p>第2回：教職カルテを基にした各自の履修状況の課題の把握</p> <p>第3回：教職カルテを基にした各自の履修状況の課題改善に向けた計画</p> <p>第4回：一日ものづくり楽校のカリキュラム構想及び広報活動等の準備</p> <p>第5回：カリキュラムの検討</p> <p>第6回：カリキュラム案の発表及びディスカッション</p> <p>第7回：プレ実習の運営準備</p> <p>第8回：プレ実習（1～2校時）（ICTの活用を含む）</p> <p>第9回：プレ実習（3～4校時）（ICTの活用を含む）</p> <p>第10回：プレ実習の振り返り</p> <p>第11回：一日ものづくり楽校の運営準備</p> <p>第12～14回：一日ものづくり楽校の実践（ICTの活用を含む）</p> <p>第15回：実践を踏まえた報告会（自身の成果と課題）</p>
事前学習	教職カルテの内容から自己成長評価を振り返り、自身の教師像と照らし合わせて課題を考察しておくこと。また、授業内容を確認し、事前学習に取り組むこと。
事後学習	毎回の授業後に学習内容を振り返り、次時に向けて準備を進めておくこと。また、全授業終了後は速やかに教職カルテの入力を行うこと。
連絡先 (担当予定教員)	<p>國吉真哉（kunishi@edu.u-ryukyu.ac.jp）</p> <p>浅井玲子（asai@edu.u-ryukyu.ac.jp）</p>
備考	第8～10回及び第12～14回は土曜日等に集中講義で実施予定

シラバス 15 教職実践演習 (15組)

提供専修	小学校教育& 中学校教育コース 教科教育専攻 英語教育専修
テーマ	ICT を活用した小学校・中学校との授業連携を考える
授業内容 と方法	本授業では、ICT を活用したプロジェクト型学習を通して小学校、中学校と連携することにより、主体的に自己の課題と向き合うとともに、実際の教育現場をよりよく知り、実践力を高めることを目的としている。授業は大きく分けて3 つの内容ー①小学校と連携した英語の授業実践、②中学校と連携した英語の授業実践、③小・中学校教員との意見交換で構成される。2 つの授業実践については、PDCA サイクルを意識し、グループで準備、実践、チェックを行う。また、授業実践については、ICT を活用して行う。各学校との連携を含め、現場の教員より今日の英語教育の課題について意見交換を行い、検討する。プロジェクト型の授業実践や多くのグループ・ディスカッションがあり、主体的な授業参加が求められる。
履修条件	英語科教育法 A、英語科教育法 B、教育実習 A を履修済みのこと。
授業計画	第 1 回 オリエンテーション (授業計画・教職カルテの点検) 第 2 回 教職の意義・各自の課題の設定 第 3 回 教育をめぐる課題(1) (小学校教員とのディスカッション) 第 4 回 小学校英語教育との連携(1) (計画) 第 5 回 小学校英語教育との連携(2) (準備) 第 6 回 小学校英語教育との連携(3) (リハーサル) 第 7 回 小学校における英語の授業実践 (オンライン/ICT の活用) 第 8 回 小学校授業実践の振り返り 第 9 回 教育をめぐる課題(2) (中学校教員とのディスカッション) 第 10 回 中学校英語教育との連携(1) (計画) 第 11 回 中学校英語教育との連携(2) (準備) 第 12 回 中学校英語教育との連携(3) (リハーサル) 第 13 回 中学校における英語の授業実践 (オンライン/ICT の活用) 第 14 回 中学校授業実践の振り返り 第 15 回 教職の意義 (これからの抱負と課題)
事前学習	教職カルテ (授業リフレクションシート、自己成長評価シート) の整理をおこない、自己の課題を考え、目標を各自で設定する。
事後学習	授業のリフレクションや学んだことをもとに修正した資料等を提出する。
連絡先 (担当予定教員)	與儀峰奈子 (minayogi@edu.u-ryukyu.ac.jp)
備考	適宜資料を配付する。

シラバス 16 教職実践演習（16組）

提供専修	特別支援教育コース 特別支援教育専攻 特別支援教育専修
テーマ	特別支援教育の役割を様々な体験から実践的に学ぼう
授業内容 と方法	<p>本授業は、学校現場での行事参加と大学における演習の大きく二つに分ける。まず、教育実習後も、実習先の学校現場を中心とした行事参加を通して、特別支援学校と継続的且つ能動的に関わっていく。</p> <p>大学における演習では、特別支援学校の学級経営、児童・生徒理解、教材開発、ICTの活用等の視点も含め、実際に学生自身が行った研究授業を題材に発表してもらう。特別支援教育専修の1～3年次を聴講者として参加させ、発表終了後には、専修全体でのディスカッションを行う。</p> <p>以上の活動を通して、子どもとのコミュニケーション、保護者対応、教師連携等に関する内容について理解を深め、特別支援教育に対する使命感、責任感を高める。</p>
履修条件	前期開講の「教職実践研究」及び「特別支援学校実習」を履修し、教職実践演習に関わるガイダンスを受けていることを条件とする。
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション（本科目の趣旨と進め方、ならびに評価方法等）</p> <p>第2回 学校行事の体験活動準備（受け入れ校訪問等）</p> <p>第3回～第8回 学校行事の体験活動</p> <p>第9回 学校行事の体験活動の振り返りレポート作成</p> <p>第10回 模擬授業実践の準備（ICTの活用を含む）</p> <p>第11回～第14回 模擬授業（ICTの活用を含む）</p> <p>第15回 活動の総括（成果と課題）</p>
事前学習	模擬授業を学校ごとに行います。実習での指導案等について、パワーポイント等を使ってしっかりとプレゼンテーションできるように準備してください。教材の写真や実物も見せるとよいでしょう。
事後学習	他の学校の実習の発表やディスカッションから学んだことを整理し、1～3年生の参考になるような資料作成をしてください。
連絡先 (担当予定教員)	下條満代 (s941221@edu.u-ryukyu.ac.jp)
備考	授業計画は、授業の進み具合によって、多少変更が生じる場合があります。特に、学校現場での行事への参加が含まれているので、変則的な日程となる場合があります。

教職実践演習 登録のためのチェックリスト（中学校教員免許）

教職実践演習の登録条件（『学生便覧』より）

卒業要件の免許（原則として小学校教育コースにあつては小一種又は中学校教育コースにあつては中一種など）必須科目を履修済みであること。

※必須科目には共通教育科目「憲法概論」・「情報科学演習」・「健康・スポーツ科学」又は「運動・スポーツ科学」・外国語科目（大学英語等）を含む。

※「教職実践研究」を履修済みであることが登録条件のクラスあり。

区 分	科 目 名（丸数字は単位数）	check	科 目 名（丸数字は単位数）	check
A 教科に関する専門的事項 （基本的に合計20単位以上修得） ※教科により異なるので自分で科目名を記載してチェックしよう。	・ ・ ・ ・ ・		・ ・ ・ ・ ・	
B 教育の基礎的理解に関する科目等（各教科の指導法含む）（右記の科目＝計33単位をすべて修得）	教職入門② 教育心理学② 教育課程① 道徳教育の研究／道徳心理学／道徳教育の理論と実践② 生徒指導論② 教育相談／学校カウンセリング② 特別の支援を必要とする多様な子どもへの理解と支援① 【以下、教科によって異なる】 科教育法A② 科教育法B②		教育原理② 教育法／教育の制度／教育行政学／学校社会学／教育社会学② 教育方法① 特別活動論② 学校教育実践研究① 中学校教育実習④ 総合的な学習の時間の授業づくり① 【以下、教科によって異なる】 科教育法C② 科教育法D②	
C 大学が独自に設定する科目 （右記の科目または上記A欄※からは4単位以上修得） ※ただしA欄で修得単位としてカウントした分を除く 注意 ここでは主な学部共通科目のみ示した。	総合演習Ⅲ② いじめ不登校② 教育実践ボランティアⅠ／Ⅱ② 新聞活用実践講座② 子どもと多言語・多文化教育② 環境科学概論② 琉球・沖縄史を学びあう② 沖縄の環境と社会② 沖縄生活文化論②		インクルーシブ教育指導法Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ② 特別支援教育の理論と実践② 模擬授業② 総合的学習の理論と実践② ※C欄には、ほかにも多数の科目があるので、『教員免許状取得の手引き』を参照すること。	
D その他の科目 （右記の科目をすべて修得）	憲法概論（日本国憲法）② 健康・スポーツ科学または運動・スポーツ科学（体育）②		大学英語（外国語科目）④ 情報科学演習（情報機器の操作）②	
E 介護等体験	社会福祉施設等における7日間以上の介護等の体験			
★ 教職カルテ	教務情報システム「教職カルテ」を入力してあるか			

専修・コース： _____

学 籍 番 号： _____

氏 名： _____